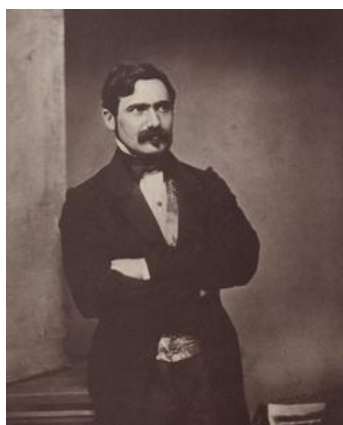


(参考) コッホ (近代細菌学の父) とヘッペンコーフェル (近代衛生学の父)

ドイツでのコレラ論争

コレラ菌自飲実験は、「近代実験医学の父」とも呼ばれたヘッペンコーフェルらしい、綿密な実験計画に基づいて行われたものであった。実験の公正を期すために、コレラ菌は予めコッホが培養し送付したものが用いられ、発症に十分だと考えられていたよりも遥かに多く、10 億個以上の生きた菌が存在していることを確認した上で用いられた。さらに実験に先立って重曹液を服用して胃酸を中和し、胃の殺菌作用による影響を除外するという点まで配慮された。実験は 1892 年 10 月 7 日から行われ、翌日にはヘッペンコーフェルには何の異常も表れなかった。10 月 9 日午後から下痢の症状があらわれ、13 日まで水様の便が続いた後、15 日になって正常に戻った。しばしば誤解されることであるが、コレラとはあくまで激しい下痢だけではなく脱水症状を伴う疾患であり、ヘッペンコーフェルはコレラ菌によって激しい下痢を起こしたもののコレラは発症しなかったのである。この結果は、コッホが提唱したコレラ菌＝病原説の欠陥を指摘するものとなり、ヘッペンコーフェルはコッホの言うコレラ菌とは、コレラとは無関係な、あるいはせいぜいコレラに伴う下痢の原因にはなるものの脱水症状には無関係なものであるとして、自説への確信を一層強めた。



コレラの研究と功績

ヨーロッパで猛威をふるったコレラが、ミュンヘンでも蔓延していた 1849 年、ヘッペンコーフェルは王国政府のコレラ対策委員会の一員として研究に着手する。当時、コレラについては何もわかっておらず、原因も伝染経路も、また治療法も不明であった。

彼は地形や罹患数、死亡率などを厳密に精査し、結果を統計的にまとめあげた。最終的な彼の結論は、生活を衛生的な状態にすること以外に方法はないというものだった。

これを受け、ミュンヘンでは上下水道の設置や屠殺場の衛生管理を行い、結果的にこの施策がコレラ流行の拡大に歯止めをかけた。これらは伝染病に対して大きな効果があり、コレラ菌が発見された後でも彼の功績は打ち消されていない。衛生学は医学上重要な学問であると認識され、ドイツの大学の医学部では衛生学の講義が行われるようになった。

ヘッペンコーフェルは広く社会に貢献する多くの功績を残し、彼が受けた勲章はミュンヘンの資料館に展示されているものだけでも 118 以上にのぼる。

※日本でも、昭和 30 年代以降、感染症は激減した。その要因は、ワクチンよりも社会全体の衛生状態の改善（上下水道の完備など）によるところが大きいと主張する医学専門家もいた。医療界全体では、ワクチンの有効性が大きく取らあげられたまま、今日に至る。